

カフカの『あるアカデミーへの報告』

—世間で生きること—

佐々木 博康*

【要旨】 カフカの『あるアカデミーへの報告』は、1917年4月に執筆され、1920年刊行の短編集『田舎医者』に収められた。猿のロートペーターがアカデミー会員の前で、自分がどのようにして言葉を獲得し、人間として生きようになったのかを語る一人称形式の作品である。これまでの研究では、同化ユダヤ人の諷刺、トラウマの克服、自由の問題、芸術家の自己超克などがこの作品のテーマとされてきた。しかし筆者は、猿から人間になる主人公ロートペーターの生き方を通じて、世間に対して強い異和を感じていたカフカが世間的存在として生きていく道を検討している作品であると考える。恋人フェリーツェとの再度の婚約が間近に迫っていた時期の作品であることもそのことを裏づける。

【キーワード】 変身 諦念 適応 自由

はじめに

短編集『田舎医者』の最後を締めくくる作品『あるアカデミーへの報告』¹⁾ (以下、『報告』と略記)が執筆されたのは、1917年4月6日から22日の間である。カフカは前年の11月末から、妹オットラが借りていたプラハ城敷地内にある錬金術師小路の小さな家に通い、多くの短編を書いたが、これもその中の一編である。

ユダヤ系の思想家マルティン・ブーバーが、彼の主催する「ユダヤ人」誌に寄稿を依頼してきたので、4月22日、カフカは『報告』を含む12編の短編を送った。掲載にふさわしい作品を選んでもらうためである。ブーバーが選んだのは『ジャッカルとアラビア人』と『報告』であり、前者は「ユダヤ人」誌の10月号に、後者は11月号に掲載された²⁾。12月19日には、友人マックス・ブロートの妻エルザが「ユダヤ人の女性と少女の集い」で『報告』を朗読した。非常に好評だったようである³⁾。『報告』は、1920年4月の終わらないし5月の初めに、短編集『田舎医者』に収録されてクルト・ヴォルフ社より出版された。

「高邁なるアカデミー会員のみなさま！」という呼びかけで始まる『報告』は、後にロートペーターと呼ばれるようになる猿が、アカデミー会員の前で自分のこれまでの生活について語る一人称形式の作品である。あらすじは次の通りである。

平成22年5月11日受理

* ささき・ひろやす 大分大学教育福祉科学部ドイツ文学研究室

ロートペーターはアフリカの黄金海岸で生まれた。ある晩、水飲み場に出たところを、狩猟のためにやってきたハーゲンバック商会の者によって撃たれ、捕獲される。再び目覚めたのは、ヨーロッパに向かう同商会の蒸気船の檻の中である。周囲の人間たちを見ているうちに、彼らと同じようになれば檻から出られるかも知れないと思いつく。唾を吐く人間たちの真似をし、もっともらしくパイプをくゆらせることで人々の喝采を博すようになる。やがて火酒を飲むことを熱心に教える男が現れる。最初は火酒の匂いだけで嫌悪を感じるが、あるにぎやかな夜、大勢の人の見ている前で、火酒の瓶を取り上げ、コルク栓を抜き、いっばしの酒飲みらしく飲み干すことに成功する。しかも、その後で「ハロー！」と人間の言葉まで発する。ハンブルクに到着したロートペーターは調教師に預けられ、多くのことを学ぶ。たくさん教師について学び、後には自ら教師を雇ってまで学び、ついには「ヨーロッパ人の平均的教養」⁴⁾を身につけるに至る。寄席に出演し、大成功を勝ち取る。現在ではパーティ、学問的な集会、打ちとけた交流会にも出席するようになり、家に戻れば調教を受けた雌のチンパンジーが待っているような生活を送っている。

カフカの多くの動物物語の一つであり、人間になった猿が居並ぶアカデミー会員の前で自己の人生を振り返るといふ奇妙な設定は、いかにもカフカらしい。

本稿では、『報告』についてのこれまでの解釈を概観した上で、カフカの他の作品との関連を視野に入れながら、この作品をカフカと「世間」の関係の観点から読み解いていく。作者を引き合いに出すという意味では一種の伝記的解釈ではあるが、作品を伝記的事実に還元することではなく、伝記的事実と作品との狭間にあるカフカ自身の生の問題を明らかにすることが目的である。

1. これまでの解釈

ブロート他——同化ユダヤ人を諷刺——

最初に、これまでこの作品がどのように解釈されてきたのかを確認しておこう。解釈としてもっとも多くの支持を集めているのは、西ヨーロッパの同化ユダヤ人の問題を扱っているとすなわける解釈である。これを最初に指摘したのは、マックス・ブロートである。

これまで書かれた中でもっともすばらしい同化への諷刺ではないか。……自由ではなく、無限ではなく、ただ出口だけを、みじめな出口だけを欲するのだ。グロテスクであると同時に高貴だ。というのも、求められることのなかった神の自由 (Freiheit Gottes) が、人間を動物として描いたこの喜劇の背後に脅かすように存在しているからだ。⁵⁾

ブロートはこの作品を、ユダヤ人の同化を諷刺した「喜劇」であるとしている。ロートペーターは、「あらゆる方向への自由 (Freiheit nach allen Seiten)」(304) と呼ばれる野生の森の自由を諦めて、人間の真似をすることで檻からの「出口」(303)を見出す。この点についてブロートは、本来の「高貴」な「神の自由」を放棄して、「みじめな出口」だけを欲している西ユダヤ人の生き方が揶揄されているとみる。

ウィリアム・ルビンシュタインもまた、ロートペーターは迫害を逃れるためにキリスト教に

改宗することになったユダヤ人であると解する。そしてロートペーターが火酒を飲む行為を、キリストを受け入れることを示す聖体拝領の秘蹟の象徴であるとみなした⁶⁾。しかしこれは、ジョージ・シュルツ＝ベールントによって明確に否定された⁷⁾。谷口茂は、「人間の所作を見事に真似て喝采を博する猿の生き方は、西欧文明に同化した西ユダヤ人の辛辣な戯画である」⁸⁾と述べ、リッチー・ロバートソンも、「シオニズムの立場から見た、西ユダヤ人に対する諷刺である」⁹⁾としてプロートに同意を示している。近年も、ペーター＝アンドレ・アルトが、「出口を見つけはしたが、自由は見出さなかった同化ユダヤ人の不安定な中間状態」¹⁰⁾が表現されているとしている。

しかし、このような解釈には、「カフカが扱っているのはユダヤ人やチェコ人やオーストリア人や彼らの問題などではない。……カフカは人間一般 (Man) について書いている」¹¹⁾とするシュルツ＝ベールントの反駁——それは本来はルビンシュタインに向けられたものだが——が有効な批判となろう。

カイザー——発達障害者——

一方、精神分析的・心理学的解釈も古くからある。ヘルムート・カイザー¹²⁾は、ロートペーターの「腰の下 (unterhalb der Hüfte) (301) への二発目の銃撃を、「性器に当たった可能性がある」¹³⁾として、カフカ¹⁴⁾の幼児期の去勢体験と結びつける。フロイトによれば、男児は3～5歳ごろになると母親に強い愛情を抱き、同時に父親を憎むようになる。いわゆるエディプス・コンプレックスである。しかし、母親への執着や独占欲は父親の怒りを呼び起こし、そのため男児は父親から罰せられるのではないかと怖れるようになる。これが去勢不安である。その結果、母親への欲求が強く抑圧され、思春期まで続くエディプス・コンプレックスの潜伏期を迎える。

カイザーによれば、銃撃の後の猿の気絶がこの潜伏期にあたり、猿が檻の中で目覚めることは、思春期になったことを意味する。檻の中の猿が不安に怯えるのは、子供時代の去勢体験がカフカには特に強く感じられトラウマになったこと、そのために思春期になって性的障害に苦しんだことを示す。そして火酒を飲むことは、「男になること (Mannwerden)」¹⁵⁾を意味する。つまり、猿が人間になるこの物語は、「男性社会に入場する」¹⁶⁾物語である。

猿は火酒を飲むことに成功し、芸人として名を上げる。「ヨーロッパ人の平均的教養」も身につける。しかしカイザーによれば、その知的発達にもかかわらず、猿は結局は猿のままである。ロートペーターが雌猿と関係を結んでいるのは、彼の「本能的な生活は猿のままにとどまった」¹⁷⁾ことを示している。カフカの本能的な面での障害は完全には克服されないままに終わったのである。しかしまさに傷があったために衝動が昇華され、芸人としての成功をもたらした。芸人として尋常ならざる業績を上げたのである¹⁸⁾。

こうしてカイザーは、猿と人間の特徴を併せ持ったロートペーター像に示されているカフカを、「きわめて才能のある、しかし発達障害でノイローゼの人間のタイプ」¹⁹⁾とみなし、次のような診断を下す。

知的能力は完全に平均を上回っている。人間に対する職業上の、また社会的な関係は、型どおりの行動と巧みな模倣に基づいている。本能生活、特に性生活は、猿のようである、つまり、発達しないままである。成熟した、正常な男性性の欠如は部分的には補償されて

いるが、依然として存在する。²⁰⁾

カイザーには鋭い指摘もあるが、最終的にはカフカを単なる「発達障害者」として片づけてしまう²¹⁾。

メッケ——同性愛的トラウマの克服——

カイザーがロートペーターの傷を、カフカの精神的な去勢体験であると考えたのに対して、ギュンター・メッケは思春期のカフカが実際に受けた、同性愛者による肉体的な暴行であると主張する。

メッケによれば、カフカは14, 5歳の頃に同性愛者によって暴行を受けた²²⁾。この推測をもとにメッケは『報告』を解釈していく。すなわち作品のテーマとなっているのは、「同性愛的暴行のトラウマをどのように処理するか、それにどう慣れるか、あるいは少なくともそれとどう折り合いをつけていくか」²³⁾ という問題である。猿とは無垢な子供のことであり、それに対して人間たちとは同性愛者たちのことである²⁴⁾。猿は最初、水夫によって火酒を飲むように手ほどきされるが、これは「同性愛の実行への訓練」²⁵⁾ を意味している。猿から人間になるロートペーターは、異性愛を断念し、同性愛の世界に足を踏み入れていくカフカのことである。カフカは心の傷を、同じ体験を繰り返すことで取り除こうとしたのである。

この解釈は、カフカが思春期に同性愛的暴行を受けたという推測が前提になっている。しかしメッケが提出できるのは憶測に基づく間接証拠ばかりで、カフカの同性愛的暴行を直接証明する伝記的事実はまったく挙げられていない。そのため、彼の解釈は説得力を欠いている。

カイザーやメッケの解釈は極端に走りすぎる嫌いはあるが、ロートペーターの「傷」に照明を当てた点では評価できよう。

エムリッヒ——自由の問題——

ヴィルヘルム・エムリッヒの哲学的解釈では、「傷」はトラウマなどではない。エムリッヒによれば、この作品の眼目は自由の問題である。猿は檻を抜け出して人間の世界に入ることに成功するが、新たに獲得された人間的自由は本当の自由ではない。猿がかつて持っていた完全な自由——それをエムリッヒは「普遍的な自由 (universelle Freiheit)」²⁶⁾ と呼ぶ——への門はもはやぐり抜けることができない。こうして人間になった猿は、「疑わしい中間的存在 (eine fragwürdige Zwitterexistenz)」²⁷⁾ として、失われた自由への痛々しい追憶とともに日を送っているのである。このような猿の存在のありかたを特徴づけるのが「傷」である。すなわちこの傷は、「生きてはいるが、損なわれており、完全な自由でもなく、完全な監禁状態でもない中間世界 (Zwitterwelt) に生きている人間の比喩」²⁸⁾ なのである。エムリッヒによれば、この作品は自由への「諦念」²⁹⁾ で終わっている。

ブロートが「神の自由」と呼んだものを、エムリッヒは「普遍的な自由」に置き換えている。これによって、宗教性が消え、一般化されることになった。また、主人公の内面に目を向け、「諦念」とともに生きる主人公像を提出した点も評価できよう。ただ、その自由論であるが、人間が社会生活を送る以上、誰もが完全な自由を失っているわけで、自由と監禁状態との「中間世界」に生きるのは当然と言える。このような自由論は哲学用語の装飾を取り除けば、野生と文明の対立という陳腐な二項対立に墮してしまいう危険性がある。

ゾーケル——芸術家の自己超克——

常に否定的に見られてきたロートペーターの生き方を肯定的に評価したのは、ヴァルター・ゾーケルである。ゾーケルによれば、ロートペーターは「一つの選択」³⁰⁾を行った。それは「適応」³¹⁾への選択である。猿のロートペーターが人間になったことは、「世間への適応 (Anpassung an die Welt)」³²⁾が成功したことを意味する。完全な自由という「自己実現」³³⁾を求めても、それは死という悲劇に終わるだけである。ロートペーターは「自己実現」ではなく、「自己超克」³⁴⁾を行う。つまり嫌悪を克服して、人間を模倣する芸人となることで、自分を檻から解放する。この意味でこの作品では「現実主義」³⁵⁾が表明されている。

なるほどロートペーターは単なる「芸人」にすぎず、「本当に同等の人間たちのところ」³⁶⁾に到達することはない。それでも猿から人間への道は、芸術家の苦悩の「昇華過程」³⁷⁾と言える。ゾーケルは次のように結論づける。

『あるアカデミーへの報告』は……つまり、人間への諷刺でもなければ、洗礼を受けたユダヤ人の寓話でもない。一人の苦しむ者が生き延びるために芸人になるという、ひとつの昇華と鍛錬の報告なのである。³⁸⁾

『報告』が「世間への適応」の問題を描いたとするゾーケルの考えに筆者も同意するが、芸術家の昇華過程を描いているとする点については首肯できない。ゾーケルは芸術家という存在に対する思い入れが強すぎるように思われる。

シュルツ＝ベーレント——「自力で身を立てた猿人間」——

ジョージ・シュルツ＝ベーレントは、「人間の自由」³⁹⁾が問題になっていると考える点でエムリッヒと共通点を持ち、またロートペーターの生き方をそれなりに評価する点ではゾーケルに近づく。

シュルツ＝ベーレントによれば、原始の森の猿だけが自由であり得る。人間たちの間に自由は存在しない。初めのうちなら、ロートペーターも自由に戻れたかもしれない。しかし、人間として成長を遂げていくにつれて、自由の門は狭まっていく⁴⁰⁾。檻に入れられた猿は幻想を抱くことなく、動物園か「出口」かの二つの可能性のうち後者を選ぶ。

シュルツ＝ベーレントによれば、ロートペーターは努力によってまがりなりの成功と安全を獲得した「自力で身を立てた猿人間 (a self-made monkey-man)」⁴¹⁾である。ただ、物質的成功のために自由という対価を支払わねばならなかったロートペーターの「歯切れのよい威勢のよさの下には、悲しみがある」⁴²⁾。しかし、『掟の前で』の男と異なり、自分で選択をしたという点で「幸福」であると言える⁴³⁾。たとえ、ひきずる足と銃撃による傷痕が、彼にかつての自由を思い出させ続けるとしてもである。

シュルツ＝ベーレントはエムリッヒとゾーケルの解釈を統合していると言えるが、「世間への適応」の観点は消えてしまっている。また、ロートペーターの発言の背後にエムリッヒは「諦念」を見たが、シュルツ＝ベーレントは「悲しみ」を見ている。

以上、これまでになされたさまざまな解釈を概観してきたが、ロートペーターの生き方を肯定的に捉えるか、否定的に捉えるかは難しい問題である。ロートペーター自身は自分の生き方をどう見ているのだろうか。そして、カフカの意図はどのあたりにあるのだろうか。以下この

問題を考察していくが、そのためにはまずカフカの他の作品との関連を見ていく必要がある。

2. 『報告』以前の作品との関係

カフカの作品は、人間を外から観察し、さまざまな状況におけるその生き方を描く通常の小説とは異なり、根本的には彼自身の生き方の問題だけを扱っているように思われる。自分の生き方を振り返り、自分にとってどのような生き方が可能なのかを探るために書かれているのである。その意味で、カフカの作品は、一種の日記、虚構によってつづられた日記とも言えるだろう。

カフカの小説に登場する奇妙な存在は、しばしば作者自身の分身である。カフカは、虫や馬や猿やネズミや犬などに擬態——それは韜晦でもある——することで自らを客観化し、それによって自身の生のありようをより広い視野から見直そうとする。同時に、現在の自分の立ち位置を確かめるのである。

カフカの多くの作品においてテーマとなっているのは、世間から疎外された主人公が、世間との関係において自己の位置をどうとらえ、どう生きていくのかという問題である。たとえば、未完に終わったカフカ最初期の作品の一つである『田舎の婚礼準備』(1907年～08年執筆)では、この問題はどのように呈示されているだろうか。

役所に勤めている主人公のラバーンは、二週間の休暇をとって婚礼の準備のために婚約者のいる田舎に向かおうとする。しかし、ラバーンは田舎に行くことに気が進まない。それは、婚約者の郷里の未知の人々との交際が重荷だからである。

気をつけて服は着込んできたけれど、夜遅く散歩する人々につきあわなければならないだろう。あそこには池がいくつかあり、その池に沿って散歩することになるだろう。そのとき僕はきっと風邪をひくだろう。みんなと話をするときだって、注目を浴びることなんてほとんどないだろう。そこにある池を、遠い国にあるほかの池と比較してみせるなんて僕にはできないだろう。だって僕は一度も旅行をしたことがないんだから。それに月について語り、至福を感じ、我を忘れて瓦礫の山に登ったりするには、年を取りすぎている。笑われるのが落ちだ。⁴⁴⁾

たとえ未知の人々との交流に対する不安があったとしても、通常は婚約に対する喜びがそれを上回っているものである。しかしこの作品断片では結婚することへの喜びはまったく表現されておらず、世間的交わりに対する重苦しさだけが全体を染め上げている。

この最初期の作品においてすでに、カフカの生涯のテーマ、世間との関わりの問題が登場している。そして、世間と関わるのが結婚と結びつけられている。後になってカフカは、実人生においてフェリーツェやユーリエと知り合い、婚約と婚約破棄を繰り返した。その際カフカは、結婚を世間への入場と同義に捉えたが⁴⁵⁾、その考えの萌芽がすでにこの断片に見られる。

田舎の人々と交わることを考えると気が重くなるラバーンは、次のような空想にふける。

それどころか、子供のころ危険が迫ってきたとき、いつもしていたようにできないものか。自分で田舎に行く必要さえないんだ。そんな必要はない。服を着た僕の体を送り出す

だけでいい。そうだ、服を着たこの体を送り出すんだ。そいつが僕の部屋のドアをよろよろ出て行っても、よろよろするのは恐がっているからではなく、からっぽの存在だからだ。そいつが階段でつまずき、すすり泣きながら田舎に行き、涙を流しながら夕食を食べるにしても、動揺しているからではない。だって僕は、僕はその間ベッドに横たわり、黄褐色の毛布にすっぽりくるまって、わずかに開いた窓から入ってくるそよ風を感じているんだから。

僕はベッドに横たわったまま、一匹の大きなカブトムシ、クワガタムシ、あるいはコガネムシの姿をしているだろう、きっと。⁴⁶⁾

ラバーンはここで自己分裂を空想している。田舎に行って本来の自分がしたくないことを片付ける自分と、虫になって安楽にベッドに寝ている自分とである。前者が「世間的存在としての自己」であるとすれば、後者は「非世間的存在としての自己」である。そして前者が『判決』のゲオルクに、後者が『変身』のグレゴールにつながっていく。

『判決』(1912年成立)の主人公ゲオルクは、父の跡を継いで商売を発展に導き、資産家の娘との結婚も決まった前途洋々たる青年実業家である。ところが、病気がちの父の薄暗い部屋を訪れた瞬間に、ゲオルクの希望に満ちた未来は瓦解する。ゲオルクの父は、突然ベッドに仁王立ちになったかと思うと、おまえはこれまで自分のことしか考えてこなかったと息子を告発し、死刑宣告を下す。息子のほうは息子のほうで、父の理不尽な判決に反発するかと思いきや、驚くべきことに唯々諾々と父の判決に従い、川に飛び込んで自殺してしまうのである。

カフカがこの作品を書いたのは、フェリーツェに最初の手紙を書いた直後である。カフカは彼女と知り合ったことで、初めて結婚を現実のものとして思い描いたと思われる。仕事においても、また結婚し家庭を築くという面でも、世間的に認められる生き方をしていく可能性、それを体現しているのが成功者ゲオルクである。ところがこの作品を書くことによって結論として出てきたのは、そのようなゲオルクの破滅、つまり、世間的存在として生きることの不可能性である。

世間的存在として生きる方向を追究したのが『判決』のゲオルクであったとすれば、『変身』(1912年成立)のグレゴールはまったく逆の方向におけるカフカの分身である。グレゴールは競争による殺伐とした人間関係が支配する社会から脱落し、また家族との心の交流も失い、虫に変身することで自閉してしまう。人間と虫のこの絶望的な距離こそが、カフカが感じていた、世間と自己の距離に他ならない。

通常の生活においては、人間同士の間で本当の意味でのコミュニケーションが成立していなくても、お互いがなんとなく習慣的に言葉を交わしていれば、往々にしてその事実には気づかないものである。ところが、そのような現実状況が人間と人間の関係としてではなく、人間と虫の関係として極端な形で可視化されると、コミュニケーションの欠落は一気に露わになる。『変身』では、グレゴールは家族の言葉を理解するが、家族はグレゴールの言葉がわからないとされている。人間と虫だから当然のように思えるかもしれないが、このようなコミュニケーションの一方通行の状態は、グレゴールの変身以前から生じていたはずである。

言葉ばかりでなく、個々の動作や振る舞いも通じない。グレゴールが家族に対して「よき意図」(192)をもって行ったことが、すべて誤解に通じる。家族という共同体——これも一種の世間である——とのこの絶対的な距離の中で主人公は見捨てられ、死んでいかざるを得ない。

『田舎の婚礼準備』で空想されたような、世間を拒絶して自己の世界に沈潜すること、それもまた死に終わるのである。

このように、『田舎の婚礼準備』、『判決』、『変身』においてカフカは、自己と世間との関係をテーマ化している。『田舎の婚礼準備』については作品が未完なので、主人公ラバーンがどうなるかは不明であるが、『判決』のゲオルクと『変身』のグレゴールは、結局は死んでしまう。カフカがこれらの作品によって自己の生の可能性を検討したとすれば、世間的存在として生きることも、非世間的存在として生きることも不可能であるという結論が出てしまったことになる。

3. 『報告』は何を描いているか

主人公は猿——世間との異和——

では『報告』では世間との関わりの問題はどうかになっているのだろうか。世間に対する主人公の強い異和⁴⁷⁾は、『変身』では人間と虫の距離として表現されていたが、『報告』では人間と猿の距離として示されている。虫よりは猿のほうが人間に近いという意味では、カフカと世間の距離は縮まっていると言えるかもしれない。しかし猿はやはり猿であって人間ではないのであり、そこに絶対的な距離があることは変わらない。カフカにとって世間との距離は、ちょっとした違和感程度のものではなく、架橋することが不可能なほどに絶対的なものだったのである。

檻の中の猿——世間に背を向けて——

世間と向き合う孤独な存在が、自分を人間たちの間にいる虫、あるいは猿と感じていたとして、ではその虫あるいは猿は世界においてどのような様態で存在しているのか。それをカフカはしばしば「檻」の中に閉じこめられた存在のイメージで捉えている。

『変身』のグレゴールは自分の部屋に閉じこもる。部屋から出てくるのは三度だけである。最初は鍵がかけられており、途中からは居間に通じる扉を開けたままにでもらえるようになるが、下宿人を置くようになると再び閉ざされたままになる。グレゴールは最後には、「堅く門がかけられ閉鎖された」(193) 部屋で誰にも知られずに死ぬ。閉鎖空間であるグレゴールの部屋は、一種の檻と考えられる。

また、後期の短編『断食芸人』(1922年成立)では、自ら檻に入る断食芸人が登場する。断食芸人は芸が終わっても、檻から出るのをいやがる。やがて断食芸がすたれると、ついには檻に入ったまま誰にも顧みられることなく断食をしつづけるようになる。『変身』のグレゴールとは異なり、断食芸人は一人でひっそりと死ぬわけではない。しかし、檻から出ることなく死んでしまう点、またその死に立ち会う監督たちが彼の最後の言葉をまったく理解していないという点では、孤独な死であることに変わりはない。檻の中で坦々と断食を続ける断食芸人、これが晩年のカフカの自己イメージなのである。

後期作品の主人公である断食芸人は自ら檻の中にいつづけることを望むのであるが、『変身』のグレゴールも『報告』のロートペーターも檻の中のことを喜んでいるわけではない。グレゴールの部屋のドアは家族＝世間との通路を示しており、グレゴールは三度そこから這い出す。しかし、そのたびに彼は自室に追いやられる。彼はできることなら檻から出たいのである。

『報告』の猿の場合はどうか。ロートペーターは、野生の自由の中で暮らしていたが、

人間に捕獲され檻に閉じこめられる。檻はすべてが格子でできているのではなく、三面だけが格子で他の一面は木箱にくっついている形のものである。猿は檻の中に閉じ込められたときの自分の状態を次のように表現している。

全体は立ち上がるには低すぎ、坐るには狭すぎました。それで私は膝を曲げ、それを絶えずぶるぶるふるわせながらかみ込んでいました。最初はともかく誰にも会いたくない、いつもただ暗闇の中にいたいと思っていたので、箱の方を向いていました。そのために後ろでは檻の棒が私の肉に食い込んでいたのです。(302)

檻が「立ち上がるには低すぎ、坐るには狭すぎ」るために、猿は体を休めることもできず、不安と恐怖におののきながら、格子になっていない唯一の面である木箱の方を向いて、「誰にも会いたくない、いつもただ暗闇の中にいたい」と思って身をかがめている、——カフカのこの部分の叙述は感情がこもっており、読者に猿の痛々しさを強く感じさせる。檻の中に閉じこめられた猿のこの状態こそ、世間におびえる孤独な存在のありようを象徴的に示したもののなのである。

出口——世間的存在として——

『変身』や『断食芸人』の主人公は、閉ざされた空間で孤独のうちに死んでいく。彼らが最後まで共同体との接点を見出すことがないのに対して、『報告』のロートペーターは、世間への「出口」を見出す。

私には出口がありませんでした。それをなんとしても作り出さねばなりません。というも、それなしには私は生きることができなかつたからです。この木箱の壁ばかり見つめていたら、確実にくたばってしまったでしょう。……それで私は猿であることをやめました。(304)

「くたばる (verrecken)」は、『変身』でも使われていた語である。死んだグレゴールを発見した手伝い女は、グレゴールの両親に、「ちょっと見て下さいよ。あれがくたばってます。あそこにのびてます。すっかりくたばって！」(194)と報告する。『報告』のロートペーターにとって、自由への道がなくなってしまった以上、檻の中で「くたばる」か、あるいは、猿であることをやめて人間になるかの二者択一しかない。

猿が「人間になる」とはつまり、カフカにとっては世間的存在になるということである。『変身』においてカフカが、グレゴールを通じて世間を拒否する生のありかたを試行したのに対して、『報告』では、世間の側へと歩み寄っていく生のありかたを試しているのである。

ロートペーターは人間を真似ることで人間になろうとする。人間のようにもっともらしく唾を吐き、煙草を吸ってみせる。そしてロートペーターが猿から人間になる決定的な要因として、この作品で長々と描かれているのは、酒を飲むようになる過程である。

酒を飲むこと——「人間共同体」への入場——

ロートペーターがそれまでの「嫌悪」(310)を克服して、ついに酒を飲むことができるよう

になる場面は、次のように描かれている。

ですから、彼（酒の飲み方を教えてくれた男——筆者注）にとっても私にとっても、なんという勝利だったことでしょう、私がある晩、大勢の人々のいるところで——おそらくお祝いでもやっていたのでしょう、蓄音機が鳴り、一人の上級航海士が人々の間を渡り歩いていました——、その晩、誰にも気づかれることなく、檻の前にうっかり置かれた火酒の瓶をつかみ、みんなの注目がしだいに集まってくるのを感じながら、これまで教えられたとおりにコルクの栓を抜き、瓶を口につけ、ためらうことなく、口をゆがめることなく、いっぱしの飲み助のように、目をくりくりさせ、喉をぐくぐくさせ、本当に実際に、すっかり飲み干したというのは、絶望的な気分になったからではなく、芸人らしく、瓶を放り投げたのは、なるほど腹をなでるのは忘れましたが、そのかわりに私は、そうせざるを得なかったからですが、せき立てられるような気持ちだったからですが、五感がむずむずしていたからですが、簡潔明瞭に、「ハロー！」と叫んだのです、人間の声を発したのです、この叫びによって人間共同体に飛び込んだのです、人々が「聞いたか？こいつ、話すぞ！」と口々に言い合うのを、汗だくの私の体へのキスのように感じたのです。(310-11)

訳文ではいくつか句点を付したが、原文はピリオドが最後に一つあるだけの、とてつもなく長い文である。しかしリズムカルな文体ですべてが過不足なく叙述されており、語り手の興奮が読者にもそのまま伝わってくるような文章となっている。

音楽が流れ、祝祭的雰囲気は漂っており、作者がこの瞬間をロートペーターの生涯の決定的瞬間として描き出そうとしていることは明らかである。酒を飲んだ瞬間にロートペーターは猿から人間になったのである。そしてまさにこのとき、ロートペーターは人間の言葉を発する。「ハロー！」と。「この叫びによって人間共同体 (Menschengemeinschaft) に飛び込んだのです」と高らかに宣言される。Menschengemeinschaft という語は、日常生活で普通に使う言葉ではなく、学術用語のような堅さのある言葉である。カフカはこの語に読者の注意をひきつけようとしているのであり、これこそ我々のいう「世間」と同義である。

ところで、ロートペーターの人生の転機となる決定的な瞬間において、カフカはなぜ酒を持ち出したのであろうか⁴⁸⁾。たとえば、パイプをくゆらせることを人間化の決定的な要因としてもよかったはずである。

酒を飲むことによって、人はしばしば互いの共同性を確認し合う。酒を酌み交わすことで人は個としての境界を取り払い、共同体に融合しようとする。多くの社会においては、酒を飲むことは、特に男性の場合、大人になることと同義であり、男性の共同体への入場を意味する。それは通過儀礼ともなるのである。ロートペーターに転機をもたらすものとしてカフカが他のものではなく酒を選んだのは、酒の持つこのような機能が念頭にあってのことに違いない。

酒を飲むことができるようになることだけでなく、猿から人間になるためのもう一つの決定的要因は「ハロー」という言葉である。「ハロー」というのは、人間社会にとってはもっとも基本的な挨拶である。そもそも、人間社会は挨拶から始まって、さまざまな世間的しきたりや慣習や因襲を表現する言葉を持っている。それは決まり文句の体系で成り立っている。社会の慣習的言語を習得し使いこなすことが世間に加わることになる。ロートペーターがひとたび世間で通用するもっとも基本的な言葉を発することができれば、後はひたすら語彙を増やしていく

だけである。

『変身』では家族の言葉は虫のグレゴールにはわかるが、グレゴールの発する声は家族には虫の鳴き声にしか聞こえない。コミュニケーションは一方通行である。ところが、『報告』のロートペーターの言葉は人間たちに理解される。それは彼が人間の言葉を真似たからである。彼の側が人間の側に歩み寄ったからである。

その後のロートペーターは、すさまじい努力によって、わずか5年足らずのうちに「ヨーロッパ人の平均的教養」を身につけることに成功する。ロートペーターは「人間共同体」との間にきわめて良好な関係を確立するに至る。

現在の心境

では、ロートペーターは現在の自身の状況について、どのような感想を抱いているのだろうか。自分が達成したものについてどのような自己評価を下しているのだろうか。

私は否定しません、それ（多くの知識を身につけたこと——筆者注）が私を幸福にしたことを。しかしまた、私は告白します、それを過大評価していないことを。当時だってそうでしたし、今日だって同じです。(312)

私の前進、これまでの到達点を眺めわたせば、嘆くこともありませんし、満足することもあります。(312-3)

全体としてみれば、私はいずれにせよ、私が得ようとしたものを得たのです。それが骨折りに値しなかったなどとは言わないで下さい。(313)

最初の引用では、「ヨーロッパ人の平均的教養」を身につけたことによって、自分が「幸福」になったことは認めるが、だからといって達成感に満たされているわけではないことが告白される。第二の引用では、「嘆くこともありませんし、満足することもあります」と、自分の人生をそこそこの人生であると冷静に見ているように述懐されるが、読者はロートペーターの内面に満たされない部分がぼっかり空いていることを強く感ぜざるを得ない。さらに、三番目の発言となると、確かに得ようとしたものを得はしたが、それでよかったのかとロートペーター自身が疑問に思っている感じを読者に与える。「骨折りに値しなかったなどとは言わないで下さい」と懇願調になっていることがその印象を強めている。

以上のように、ロートペーターの現在の心境は、幸福でないことはない、他に道がなかった、自分が達成したものに満足していないわけではない、というもので、自分の人生を消極的に受け入れているにすぎない。大きな後悔もないかわりに、人生に対する強い肯定、内面にわき上がる喜びや充実感もない。どこか寂しい感じがにじんでいる。読者は結局、ロートペーターが自身の人生を諦めをもって眺めているのではないかという印象を抱くことになる。

諦念はなぜ？

この諦念は何に由来するのだろうか。なぜ、ロートペーターは自分の人生に満足していないのだろうか。それはまず第一に、本来の意味での自由——それは野生の猿の自由として表現さ

れている——が永遠に失われたままだからである。人間になることは、世間的慣習やしきたり、そしてそれを表現する慣習的言語の世界——カフカはそれらを「法=掟 (Gesetz)」と呼んでいる——で生きることである。自分をその枠組みの中に当てはめて生きていくことである。それは一方で安定をもたらすが、他方ではより広い世界で生きる自由の断念を前提としている。

第二に、現在の人間社会での成功、つまり人間社会への適応が、世間の人々が使っている言葉を真似ることによって可能になったことだからである。自分の本来の言葉——猿にもそのようなものがあるとして——を失い、本来の自分の生き方を失うことによる成功なのである。それは、本当の意味の自己実現ではない。仮面が成功を収めているにすぎない。

さらに第三に、いかに器用に人間を真似ようと、猿はあくまで猿のままであり、永遠に人間になることはできないということである。つまり完全に人間共同体の一員になれるわけではなく、必死の模倣によってかろうじて人間共同体に受け入れられているにすぎない。人間への異和自体は、消えたわけではなく、最後の最後まで残り続けるのである。

外部の判断を拒否

最後に、アカデミーの会員に向かって、次のように述べてロートペーターの報告は終わる。

ついでに申せば、私はいかなる人間の判断も望みません。ただ知識を広めたいだけであり、報告しているだけなのです。アカデミーの貴頭の方々、みなさまにもただ報告したにすぎません。(312)

ロートペーターは長々と自分の来し方と現在の心境を語った末に、そのような自身の生についての外部からの「判断」を拒絶する。それは一方では、それ以外に道はなかったのだから自分の生き方はこれでいいのだと肯定し、またそのような生き方を今後も続けていくしかない諦めとともに結論を下しているからでもあろうが、他方では、外部の判断によって、自分の生に折り合いをつけている現在の心境を揺るがせられるのを避けようとしているためでもあるだろう。

むすび

『報告』の主人公である猿のロートペーターは、世間的存在として生きる方向を試すためにカフカが持ち出した自分の分身である。『判決』と同じ方向での試みとなるが、ゲオルクとは異なり、ロートペーターは破滅することなく、社会的成功を収める。つまり人間社会への適応に成功する。しかしそのことによって生の充実感が得られたかと言えば、決してそうではない。ロートペーターの現在の心境の基調となっているのは諦念である。

『判決』で示されたように、さまざまなものを犠牲にしつつ、商売の世界をたくましく生き抜き、世間的な意味での成功者になることは、カフカには不可能である。しかし『変身』のグレゴールのように、世間と徹底的に断絶すれば、待っているのは死である。『報告』での一応の結論は、異和を抱えつつも、世間に自己を合わせて生きていくしかないというものであるが、その場合、生きている充実感、生の喜びを犠牲にせざるをえない。

『報告』は、フェリーツェとの婚約とその破棄という波乱を経て、再び彼女とよりを戻し、

再度の婚約に向かう、カフカが精神的にある程度安定していた時期に書かれた。フェリーツェとの結婚を世間への入場と見なしていたカフカにとって、この方向を進む自分を客観的に見つめ、それを突き詰めたとき、自分は自分の人生についてどのような思いを抱くのか、——カフカはこのことを検討するために、この作品を書いたに違いない。この時期のカフカは、世間に出て人間を演じ続けていくことで、人間の共同体に受け入れられる道を進んでいくしかないと考えていたのである。

註

- 1) 原題 *Ein Bericht für eine Akademie* にある Akademie を、「学会」ではなく、「アカデミー」と訳すのは、Akademie がこの作品では、通常の研究発表の場ではなく、若干のものものしさといかめしさを伴った場というニュアンスで使われていると考えるからである。
- 2) Kafka, Franz: *Drucke zu Lebzeiten. Apparataband*. Hrsg. von Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Frankfurt am Main: Fischer 1996, S. 308.
- 3) Alt, Peter-André: *Franz Kafka. Der ewige Sohn. Eine Biographie*. München: C. H. Beck 2005, S. 521.
- 4) Kafka, Franz: *Drucke zu Lebzeiten*. Hrsg. von Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Frankfurt am Main: Fischer 1994, S. 312. 以下、このテキストからの引用については本文中に頁数のみを記す。
- 5) Born, Jürgen (Hg.): *Franz Kafka. Kritik und Rezeption 1912-1924*. Frankfurt am Main: Fischer 1979, S. 128.
- 6) Rubinstein, William C.: *A Report to an Academy*. In: *Franz Kafka Today*. Edited by Angel Flores and Homer Swander. New York: Gordian Press 1977, S. 55-60.
- 7) Schulz-Behrend, George: *Kafka's "Ein Bericht für eine Akademie". An Interpretation*. In: *Monatshefte für deutschen Unterricht, deutsche Sprache und Literatur*, LV, January 1963, No. 1, S. 1-6.
- 8) 谷口茂『フランツ・カフカ論』明星大学出版部、1983年、262頁。
- 9) Robertson, Ritchie: *Kafka. Judentum, Gesellschaft, Literatur*. Stuttgart: Metzler 1988, S. 218.
- 10) Alt, a. a. O., S. 524.
- 11) Schulz-Behrend, a. a. O., S. 3.
- 12) Kaiser, Hellmuth: *Franz Kafkas Inferno. Eine psychologische Deutung seiner Straffantasie*. In: H. Politzer (Hg.): *Franz Kafka*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1973, S. 69-142.
- 13) Ebd., S. 73.
- 14) カイザー自身は、精神分析的考察に慣れていない読者の誤解を避けるためとして、「カフカ」とは言わずに、K という仮の名を使っている。しかし実質的には K=カフカである。
- 15) Ebd., S. 77.
- 16) Ebd., S. 72.
- 17) Ebd., S. 81.
- 18) Ebd., S. 82.
- 19) Ebd., S. 83.
- 20) Ebd.
- 21) 他にロートペーターの傷を「去勢の傷」とみなす研究者として、ハンス・ヒーベルがいる。Hiebel, Hans H.: *Die Zeichen des Gesetzes. Recht und Macht bei Franz Kafka*. München: Fink 1983, S. 124-128.

- 22) Mecke, Günther: *Franz Kafkas offenbares Geheimnis. Eine Psychopathographie*. München: Fink 1982, S. 20.
- 23) Ebd., S. 115.
- 24) Ebd., S. 115-7.
- 25) Ebd., S. 122.
- 26) Emrich, Wilhelm: *Franz Kafka*. 9. Aufl., Königstein am Taunus: Athenäum 1981, S. 129.
- 27) Ebd., S. 128.
- 28) Ebd.
- 29) Ebd., S. 129.
- 30) Sokel, Walter H.: *Franz Kafka. Tragik und Ironie*. Frankfurt am Main: Fischer 1976, S. 392.
- 31) Ebd., S. 395.
- 32) Ebd., S. 380.
- 33) Ebd., S. 392.
- 34) Ebd.
- 35) Ebd., S. 398.
- 36) Ebd., S. 390.
- 37) Ebd., S. 386.
- 38) Ebd., S. 389.
- 39) Schulz-Behrend, a. a. O., S. 3.
- 40) Ebd., S. 4.
- 41) Ebd., S. 5.
- 42) Ebd.
- 43) Ebd.
- 44) Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente I*. Hrsg. von Malcolm Pasley. Frankfurt am Main: Fischer 1993, S. 14-5.
- 45) たとえば、1917年8月の咯血直後に、カフカは「世間 (die Welt) —Fはその代表者 (Repräsentant) にすぎない—と僕の自我が、対立を解消することができず、僕の体を引き裂く」(Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente I*, a. a. O., S. 402) と述べている。Fとはフェリーツェ (Felice) のことである。カフカはフェリーツェ=世間と捉えており、したがって彼女と結婚することは世間に入場することを意味していた。
- 46) Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente I*, a. a. O., S. 17-8.
- 47) カフカの世間との距離感を示すには、「周囲としっくりしない感じ」を表す「違和感」では弱すぎるため、あえて「異和」という語を使っている。「異和」はまだ正式な日本語とは言い難いところがあるが、『日本国語大辞典』(小学館)の「いわかん」の項目では「違和感・異和感」と両表記が挙げられ、平野謙の「外界と自我との異和感」という例が載っている。
- 48) カフカ自身は酒を飲むことはほとんどなかった。たとえば、1912年11月7日付けのフェリーツェ宛の手紙において、「もちろん私は煙草も吸わず、酒もコーヒーも紅茶も飲みません。……チョコレートもだいたいにおいて食べることはありません」と述べている。(Franz Kafka: *Briefe 1900-1912*. Hrsg. von Hans-Gerd Koch. Frankfurt am Main: Fischer 1999, S. 218) ただ、ドーラ・ディアマントとベルリンで暮らした最晩年には、以前より酒を飲むようになった。カフカの両親に宛てたドーラの葉書には次のように述べられている。「フランツは熱烈な愛飲家になりました。食事のときはほとんど欠かさずビールかワインを飲みます。もちろん、あまり大量に飲むということはありません。週に一本トカイ・ワイン、あるいは別の通好みのよいワインを空にします。」(Kafka, Franz: *Briefe an Ottla und die Familie*. Hrsg. von Hartmut Binder und Klaus Wagenbach. Frankfurt am Main: Fischer 1975, S. 216)

Kafkas Erzählung *Ein Bericht für eine Akademie*

— Leben in der Welt —

SASAKI, Hiroyasu

Abstract

Diese Arbeit ist ein Versuch, Kafkas Erzählung *Ein Bericht für eine Akademie* neu zu interpretieren. Das Werk wurde 1917 verfasst und in die 1920 veröffentlichte Sammlung *Ein Landarzt* aufgenommen.

Zum Inhalt: Ein Affe namens Rotpeter, der als Ich-Erzähler fungiert, berichtet vor den Mitgliedern einer wissenschaftlichen Akademie darüber, wie es dazu kam, dass er die Sprache erlernte und wie ein Mensch lebte.

Die vorliegenden Interpretationen fallen recht unterschiedlich aus: Die einen sehen in der Erzählung eine Satire auf den assimilierten Juden in Westeuropa, andere verstehen sie als eine Auseinandersetzung mit Kafkas traumatischen Ängsten, die teils auf eine jugendliche Vergewaltigung durch einen Homosexuellen zurückgeführt, teils als Kastrationsängste verstanden werden, wieder andere als eine Diskussion des Problems der Freiheit oder auch als Erörterung der Leiden eines Künstlers wie seiner Versuche, diese zu sublimieren.

Kafka hat in jedem seiner Werke Persönlich-Biographisches verarbeitet. Rotpeter steht für den zutiefst entfremdeten Schriftsteller: Wie dieser ahmt er die Menschen nach und bemüht sich um Aufnahme und Akzeptanz in ihrer Gemeinschaft. Es geht letztlich um eine resignative Anpassung an die Welt, wie sie ihm erscheint.

Biographischer Hintergrund: Kafkas bevorstehende nochmalige Verlobung mit Felice Bauer, die für ihn in dieser Situation diese Welt und ihre ganze Problematik repräsentiert. Rotpeter ist also eine Spiegelung seiner selbst, das Bild, das er sich von sich und seiner Zukunft macht.

[Key words] Verwandlung, Resignation, Anpassung, Freiheit